

Fate / Twilight Stance

仁科 学

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「立ちなさい。アンタ、それでも私のマスターなの？」

これは、あらゆる願望を叶えるとされる聖杯を巡る争いと、それに巻き込まれたごく普通の少年・岸波 野花（きしなみ のはな）の物語。

（※隔週更新）

目次

第一話	黄昏時の遭遇	1
第二話	岸波野花の嘆息	13
第三話	それぞれの背景(1)	23
第四話	それぞれの背景(2)、召喚	

第一話 黄昏時の遭遇

―秋口の、日が傾き始めた時だった。

田舎町の校舎の廊下を、そこには不釣り合いな銀髪の白人男性が歩いている。

彼が、階段前の全身を写すタイプの鏡に差し掛かったとき、

「……………クラコビチャツク先生？」

との呼び掛けに応じて、振り返った。

後ろにいたのは、短めのおかっぱ頭をした、少し小柄なセーラー服の女子生徒であった。

「モウ……………カッエル、ジカンヲスギテ……………」

などと片言の返事をする男性の言葉を遮るように、女子生徒が、

「これ……………先生のお忘れものだと思うんですが……………」

とプリントファイルを提示してきた。

「次が移動教室だったので……………後で渡そうと思っていたんですが、渡しそびれてしまつて……………今になりました」

女子生徒が首を傾げて笑いかける。

男性の方は一瞬反応が遅れてから、

「アア……アリガトウ」

と返した。

「ヨク……ワカッタネエ？」

「……髪の毛です」

「……ホワアイ？」

そんな男性の応答は、いくらか声のトーンが上がっていた。

「銀色の髪がプリントとプリントの間に挟まっついて……その色は、先生以外にいない色ですから……すぐに分かりました」

それを聞いた男性は、何気なくプリントをパラパラッと何枚かめくってみて、最後から2枚目のプリントに、言う通り確かに、銀色の髪が1本挟まっついていた。

また少しの間が出来てから、

「イヤア……ホントニ、アリガトウ」

と、男性はファイルを持つ手を上げて、伝えた。

そうして振り返ろうとしたとき、女子生徒がボソリと、こう呟いた。

「実は……それだけじゃ、ないんですけどね」

自然、立ち止まる男性。背中を向けていたが、首から上は彼女を見ている。

彼女は首を引つ込め、若干斜め下を見つめ、頬を赤らめている。

「……ジツハ？」

などと聞き返されれば、首を伸ばして、正面を向いて、

「私も……忘れ物しちやいまして」

と告げた。

言った後で、赤い顔のまま、少し口角を上げた。

「……教室の鍵つて、わかりますか？」

首を傾げて尋ねる女子生徒に、男性は、

「アアツ……」

とこちらもこちらで首を傾げつつ応じ、また続けて、

「……ワカッタヨ」

そう笑いかけた……

——このあと、二人の姿はある教室の中にあつた。

そこは実験室らしい。部屋の周囲には筋肉のついた人体模型やら、薬品の瓶やら、空のビーカーやらが置かれている。

今二人は、特有のシンクつきの黒いテーブルの前で、少女はテーブルの下に覗き、男性はその傍らで彼女を見ている。

「おかしいですね……」

とは少女の弁。

「……ここだと……思ったんですけど」

次には、彼女がこう呟く。

「……ノー」

との声を漏らした男性は今、両手を軽く広げて、顔は斜め上を向いている。

「いやあ……すいません」

少女はゆつくりと上体を起こすと、横にあつたイスに腰を下ろして、

「……勘違いだったみたいです」

と言い、また口角を上げた、何も言わずに睨み付ける横の男性の顔をしばらく見たあとでは、口角を下げ、首も下げた。

「イッタイ……ドコニアルンデシヨウカ？」

そんな呟きを漏らした男性。

他方、当の女子学生の方は、首を下げていることもあつてか、視線が男性の手元についている。

「あの……前から聞いてみたかったですけど……」

そうゆつくりとした口調で言ったのは少女の方で、この直後、男性の視線が下がる一

方で、少しずつ彼女が上げた視線。

必然的に、両者の視線が合致し、その瞬間、少女が少し微笑んだ。

「……ナンダイ？」

と男性が聞き返す。

「いえ……いや、全然大したことじゃないですけど……」

首を傾げて笑いかける少女。

そんな彼女の次の台詞で、男性に激震が走る。

「どうして……いつも手袋をされているんですか？」

それまで、睨んではいたが、幾らか和やかだった顔つきであった彼が、正に一瞬で変わったのである。

冷たいというよりは、神秘的な顔付きであった。

話しかけた少女の方にもそれは伝わり、

「あの……ダメでしたか？」

慌ててそう言った。

すると、男性は急に顔色を戻し、

「イヤ……ダイジョーブだよ？」

と笑いかける。

更に、その場で左の手袋を外し、その何の変哲もない至って普通の手を、彼女の前に出した。

また、

「タダノ、ファッション、だよ」

とも。

「……そうなんですか……いや、てつきり……何かあるかと思つて」

笑みを浮かべる口許を左手で押さえつつ、彼女がそう返す。

「ソレジャ……ソロソロ、カエロウカ？」

「……そう、ですな」

言葉と共に、スカートの前端に手を添えて、立ち上がる少女。

それを確認すると、男性は振り返った。

しかし、またも彼は呼び止められることになる。

「ちなみに……右手はどうなんですか？」

そんな声を背中で聞いた。振り返れば、彼女は先程より一歩踏み込んでいて、少し首を振れば鼻同士が当たるといふばかり、側にいた。

「……見たいです」

と笑う少女。

横で男性は、ゆつくりと唾を飲む。

「……ダメですか？」

少し、首を傾げる少女。

男性は胸の前で両手を振り、

「ノー、ノー……ゼンゼン、オーケーデス」

と笑いかけて、その手の位置のままに、右の手袋の方に手をかける。

そうしてめくると……

「……えっ？」

右手の甲には、奇妙な傷跡がある。

六角の星形を、クワガタのアゴのような形が囲むような構図。傷跡であろうが、何かのマークのようでもあった。

「スコシ……ニホンニクルマエニ……ケガヲ、シテシ……」

彼がそう言いかけたところで、遮るようにこう返事が返ってきた。

「……やっぱり」

と。

「わかりますよ、それ……令呪でしょ？」

そう言ったのは、彼女。

男性の表情がまたも強張る。

「……知ってるのか？」

そう言った男性の言葉は、片言ではなかった。

少女の顔は、このとき下がっていた。

「そりゃあ……フツ、疑いますよ？この秋津市（あきつし）なんて田舎町に、急に手袋をした外国語の教員が転任してきたならば……現に、当たっていた訳で」
言いながら少女が顔を上げれば、表情は先程から変わらぬ笑顔だった。

「やめてください……怖いですよ？」

なんて言いながら、首を傾げる。

「……オマエ、一体」

「……ご安心ください。私は聖堂教会の人間です。信じてもらえませんか？」

上目遣いで見つめる少女。

「証拠は……あるのか？」

そう告げられて少女は、1歩、2歩と下がり、後ろのテーブルに腰を据えると、右腕をまくって、

「……………これで、どうですか?」

と見せた。

彼女の右腕には、何本もの赤い線が描かれていた。

「これは何れも……………アナタの手にあるものと同じ令呪。といつてもこれは、預託令呪と言つて、以前の参加者が使用せずに残つたもので、私が今回、監督役を任されるにあつて、母から受け継いだものです」

まくつた腕を元に戻したのち、続けて、

「……………信じていただけますか?」

とまた首を傾げがちに尋ねる。

「まあ……………どちらにせよ、いいことなんですけど……………監督役つて役職である以上、誰がマスターで、どんなサーヴァントを従えているかは、一応知っておく必要がありますので……………少なくとも、これだけに答えていただきたいところですが……………どうです? アドリアノ・クラコビチャツク先生」

テーブルの上に腰掛ける彼女は、右へ左へ体を揺らしながら、たまに体とは別方向に首を傾げている。

「……………他に、マスターは確認されているのか? サーヴァントも、だが」

と男性が告げた。返答は、

「お答えできません……個人情報ですから」

とのことだった。

「ただ……まだ全員が確認された訳ではない、とだけ……まあ、もともと、それはこうしてアナタに提示している時点で、それはお分かりでしょうが」

そう言っている間だけ、少女は体を止めるのだった。話を終えれば、また動き出す。

「でも、ですよ？……こうして開示しないということは、逆に言うところ、ここでの内容は口外しないという証明になっている訳ですから……率直に言ってもらっていいんですよ？」

少しの間を開けて、このクラコピチャックという男は言う。

「まだ、召喚はしていない。先に、この秋津の街の様子を見ておきたかったからな」

その一言に、微笑む少女。

「……召喚のご用意は？」

「勿論ある……物は、アーサー王の円卓の欠片。うちの衛宮（えみや）って助手が届けてくれることになってる……三日後、駅で落ち合ってるな」

「そうですね……」

少女がテーブルより降りる。地に足がついたタイミングで、体操選手みたく、両手を広げる。

「……………残念」

ポージングそのままに、相手の顔も見ずに、そう言った。

「はっ」

と聞き返した男だったが……

「すいませんねえ……いや、別に、先生に恨みがある訳ではないんですよ。ええ、本当に……でも、言ったじゃないですか？他のマスターの話は、できないと」

言葉のあとで、首を振り、クラコピチャックの方を見れば、彼は胸を槍に貫かれていた……

「…………オマエも、マスターだったのかあ…………ゴホオツ」

吐血するクラコピチャック。同時に、彼の体が地面へと倒れる。

「…………お答えできません」

女はまたも、首を傾げて、そう告げる。

「サーヴァントが…………いれば…………クソツ、クソツ」

床へと広がっていく血の水たまり。

少女はしばらく、それをただじっと見つめていた。

やがて男の動きがなくなるまで。

「ランサー……ご苦労でした」

そう言った彼女の視線は、死体の方に。

すると、部屋のどこからか、

「……片付け、手伝おうかい？」

と返事が返ってきた。しかし、その姿はどこにも見えない。

「大丈夫です……神秘の秘匿は、監督役の業務ですから」

「それなら、後よろしく……オジサン、寝るぜ」

——これより数分後、校舎を去るときに、彼女は1度、ある名前は呟くことになる。

それは、こうだ。

「……エミヤ、か」

と。

(To Be Continued……)

第二話 岸波野花の嘆息

ボクの名前は、野花（のはな）。フルネームは、岸波 野花（きしなみ のはな）。

よく間違われて迷惑しているのだけれども、こんな名前でも男だ。

別に、それ以外に特別なことはなかったと思う。自他ともに認める普通少年。今年秋津市の高校に転校してきた2年生。

……強いて言うならば、ここ最近、手の甲に気付けばヘンな傷が出来ていること。あとは、欲がない、時々言われること。それぐらいかな。

自分のこと以外だと、昔、もう亡くなってしまったおじいちゃん家の倉庫から、よく分からない呪文のような言葉が書かれた本を見つけたことはあった。何だっけな、最近、これも何故かよく思い出すんだけど。

—そんな割と普通なボクなんだけど、今日は何て言うか、普通じゃない。

だって、普通……槍を持ったオジサンに追いかけられたり、するかい？

「……なあ、よう……いい加減、観念してくれよ。オジサンだって、殺す気はないんだぜえ〜？」

よく言うよ。

オジサン。アナタが投げた槍が今、目の前に木に刺さっているんですけど。貫いてるんですけど。初めて見たよ、木に物が貫通しているところなんか。

って、考えている。側の木に隠れながら……

―順を追って、話をするよ。

すべての始まりは、八津場 夏菜（やつば かな）ってクラスの女子が、

「突蔵山（とつくらやま）に肝試しに行こう」

と言い出したことから。先週のことだ。

突蔵山は、地元の間で有名な心霊スポット。

何でも60年も昔に、ここで外国人男性が惨殺された姿で発見されたとかで。

そこから尾ひれがついて、やれ100年前にはどうか、もつと前にもとかって噂になったのだけど、正直、60年前のどうかって話からして、本当はどうかは分からないらしい。

「……いいね」

って乗ったのは、茂田 保安（もだ ほあん）。彼も、うちのクラス。

パーマをかけた茶髪の、俗に言うチャラ男。それで、

「週末に行こうぜ」

という話になった。

これに眞下（ました）、沼津（ぬまづ）、堅城（けんじょう）っていう、知っている人間からすればいつものメンバーも加わり、正直に言えば、それで終わってくればよかったのに、何故か八津場さんが、

「岸波クンも行こうよ」

って言ってきた。

突然のことに、ボクは、

「……………え？」

なんて間抜けた声で応答してしまった。

5人の視線がこちらに集中する中、ボクは少し反応が遅れて、何秒か後で、

「ボクは……………いいよ。別に」

と返した。すると、眞下くんに、

「なんだよ、ノリ悪いなあ」

だとか、堅城くんに、

「ビビってんのお？」

だのと言われてしまった。

「何かさ……………やめた方がよさそうだし」

というのが、ボクの言い分。

それを聞いて、

「やっぱビビってんじゃん」

と堅城が横で笑う。

次にボクが彼らから目を外して、教室内を見渡していたら、ある人と目が合った。

それは、遠坂 新生（とおさか しんせい）という、うちのクラスの優等生。

渋い顔でこちらを見ていたかと思えば、首を振ってこちらに合図してきた。恐らく
「断れ」って言いたかったんだろう。

すると、

「なあ、ノハナア……」

と急にボクの右肩に手を置いてきた。見ていなかったせいで、ボクはつい、

「……………へっ」

と、また頓狂な声で返事をしてしまう。これは丁度、ネコがキュウリをへびと間違えて跳ねるように。

この手の主は茂田くんで、ここから更に、

「行こうぜ、肝試しに、よ……オマエ、度胸あるからよ。大丈夫だろう？」

などという安い説得に及んできたのである。

こんなものは、水分だらけで栄養価の少ないキュウリと同じ。それぐらいにボクには

得のない誘いだっていうのに、この人数で言ってくるから、カエルを脅かすへびよろしく、

「ああ、わかったよ」

という返事を強いるのである。

直後、授業開始のチャイムが鳴って、みんなが席に戻る。

ボクもボクで、あと数秒、何も言わなければやり過ぎせたのに、と後悔していた。

一方で、

「サンキュー、岸波……オマエ、やっぱりわかってるぜ」

そう言うのと茂田くんは、ボクの背中を叩いた。また堅城が、

「ちゃんと予定開けとけよおー」

と言った。

これに対し、ボクはひとまず彼らに笑顔を向けたが、背中に感じる遠坂くんの視線が痛かった。

—その日の下校時刻。

先生へ提出物を届けてから、教室へと戻ろうとする途中で、荷物片手で出ていく遠坂くんとすれ違った。

ボクは右手を挙げて、

「おお……」

とかなんとか言うのと、向こうは急に、

「……どうして断らなかつた？」

と言つてきた。

あれから時間が経つていて、ボクが思い出せないでいると、

「肝試し」

そうボソリ。

「ああ……いや、楽しそうだったから」

ボクは笑顔でそう答えた。けれど、

「楽しそうなヤツの顔には見えなかつたけどな」

と言いつ返されてしまった。

「……そうかなあ？」

なんておどけてみせたところで、到底信じてもらえるはずもなく、1歩踏み込んで耳

元で、

「優しいのは結構だが……断りたいときには断らないと、漬け込まれるだけだぞ」

と言いつ残して、ボクには返答も許さずに、そのまま帰つてしまった。

—その後、教室で帰る準備をしていたら、一人の女の子がやつてきた。

短めのおかっぱ頭をした、少し小柄な女の子だった。少なくとも、うちのクラスの人ではない。

ドアをノックしたので、気が付いて開けると、

「……遠坂先輩はいらっしゃいますか？」

と言っているのである。

それにボクが、

「もう帰っちゃったよ」

と告げると、

「ああ……そう、ですか」

と言い、うつ向いて申し訳なさそうな顔をした。

慌てて、

「伝言とかあれば……聞くけど」

と言えば、彼女は表情とかはそのままで、

「伝言という程のことはないんですけど……ただ、コトミネが探していた、と言ってもらえれば」

と言った。

「……コトミネ？」

聞き返すボクに、彼女は顔を上げて、

「はい……言葉の言（コト）に、ミネは山の上に書く字で……」
と説明してくれた。

「わかった。明日、伝えとくよ」

「ありがとうございます……」

返事と共に、一礼する彼女。次の、

「……それでは失礼します」

という言葉の後にも彼女は、頭を下げた。

「……ああ」

とボクも会釈を返した。

そのまま帰るかと思って、その後ろ姿を目で追っていると、何歩か先で振り返り、

「……先輩」

と言った。そして、振り返り、こう言った。

「……お名前とか、聞いても大丈夫ですか？」

「ああ……岸波っていうんだよ」

「そうですか……」

こうした一連の会話の最後、つまりは次に彼女が言った言葉であるが、とにかくそれ

にボクはドキツとした。それは、

「お疲れ様です……岸波先輩」

って言葉。笑顔で、しかも少し首を傾げながら。

彼女がそう言つて帰つた後で、思わず、

「羨ましいな……遠坂くん」

なんて言つてしまったことを、すぐに後悔した。

―そして迎えた、肝試し当日。

遅れてきた茂田くんを待つている間に、他のメンバーが、

「……クラコビチャツク先生いるじゃん？」

「英語の、でしょ？」

「行方不明なんですよ、確か」

「そうそう……あの人をね、この辺りで見たって人いるんだって」

「マジで？」

「まさか……」

「いや……関係ないでしょ」

「でも……もしかすると……」

「……よせよお」

なんて話をしていた。

そのときは、噂が噂を呼んだだけだろうって、何も思わなかったけれど、今思えば、あのときに止めていれば……

(To Be Continued……)

第三話 それぞれの背景（1）

—壁に赤い火の灯った松明が何本と立て掛けられてもなお、そこは足元の見えない暗い室内だった。

そんな部屋の中央に、彼は立っていた。

「……フウツ」

と息を吐いた彼が1歩、2歩と後退りすれば、その足元には見えにくい赤い線で何か円形の模様が描かれている。

また、彼の手には、首があらぬ方向を向いた血塗れのニワトリが握られている。

「遂に……やるんですか？」

突然、背後からそんな声が出た。

彼が振り返ってみれば、そこには見慣れた少女の姿があった。短めのおかつぱ頭の少女が。

「……言峯（ことみね）、何のようだ？」

と告げた彼。

言峯は、手を背中で組み、スキップで近付くと、彼と互いの鼻が当たりそうな位置で

もつてこう言う。

「そう怖い顔をなさらないでくださいよお、ご当主様……御様子からお察しするに、今宵、召喚の儀を執り行おうおつもりで？」

と。

「まあ……そんなところだ」

「……へえ」

その返事と共に、ゆっくりと後ろへと下がった彼女だったが、その後向き直つて、例の赤い線のサークルのその中央へと近付いた。線を踏まないよう爪先立ちで、1歩進む毎に彼の顔を笑みを浮かべるその顔で一瞥しながら。

そうして中央に置かれていた物を掴み上げ、

「……何ですか？このボロい板切れは」

などと口走る。

彼女の手に握られていたのは、目の部分に傷がある鳥を象つた木製の人形だった。

「こんなんで……どんな英雄様が出てきてくれると言うんです？」

言峯は笑っている。

「ヒンドウー教の聖典の1つ『マハーバーラタ』にいわく……その者の名は『純粋な行為の実行者』を意味する……」

というのが、男の答えである。

「それより……クラコビチャツクの件はどうなった？」

更に続けて、こどもも言った。

「抜かりなく……ただ」

「……ただ？」

「エミヤなる助手の存在が確認されていますが……クラコビチャツクの証言にあった期日に、特定の場所に現れなかった……なので、今はクラコビチャツクが拠点を置いていた辺りにランサーを回らせておきます。怪しいものがいれば、迷わず殺せ、と」

言峯が近付きながら、そう告げる。

「クラコビチャツクは……令呪を何者かに譲渡した形跡があったそうだな？」

「ええ……」

ゆつくりと目を閉じる男。

「円卓の欠片……召喚に成功すれば、厄介な相手となるだろうな……」

「インドの大英雄様より強い？」

言峯が冗談っぽく笑いかける。

対する男の反応は重く、少しばかりの間、唸り声を上げていたかと思えば、

「何にせよ……苦戦は免れまい」

とゆっくりとした口調で返す。

すると、言峯は、どうしたことか、クスクスと笑い出し、

「これだけ用意周到に準備をしてきても、苦戦は免れないだなんて……謙虚なんだか臆病なんだか」

などと言うのだ。

「全てのサーヴァントを手中に置き、戦わずして勝利する。それこそが最上の策であり、聖杯は我が遠坂の悲願だ」

とは、男の弁。

「その信念を否定する訳ではありませんが……」

言峯は、そんな台詞と共に、人形を元あつたサークルの中心部に置き直す。

それから向き直って、こう話を続けた。

「……そんなに上手くいけますかねえ？」

そう言いがちに、またも笑いかける。

「いかにさ……この未熟者の為に多くの遺産を遺してくださった御先代の為にも」

この一言を言う途中で、何故だか男は身を翻し、言峯には背を向けた。

すると、あの言峯が足音は殺しつつ、ゆっくりとその背後まで忍び寄り、男の耳の側で、

「期待してますよ……」
「御兄様」

と告げた。

少しばかりの間を挟み、男がゆっくりと振り返ったときには、もう言峯は彼の視界から消え失せていた。

男はそれから一言、

「……若刃（わかば）」

と呟くのだった……

——この2日前。

ロンドン郊外に位置し、それは中世と近代とが入り混じったような街並みの中に立つ昔ながらの時計塔。その中を行き交う人の群れに、彼女の姿はあった。

黒いトレンチコート、黒いジャケット、黒いスラックス、黒いベスト、ダークグレーのシャツに、黒いネクタイ。暗い茶色の髪を編み込んだ、長身の女性である。

トランクケースを引き摺りながら、廊下をそそくさと歩いていく最中、

「……エミヤ」

そんな声彼女を呼び止める。

声の主は、藍色の詰襟の服を着た、長めのボブカットをした青年だった。

彼女の背、窓際に立つ彼は、物憂げな表情を浮かべ、

「……行くのか？」

と尋ねた。

女は、振り返らず、ただ、

「ええ」

とだけ答えた。

「出発は……明日だと聞いていたが」

「アドリアノと私の間じゃ、いつもやってることよ。予定をわざと守らないのは……どちらかが合流前に敵に捕まるなどの自体に陥った場合に、共倒れを避ける為」

「それは……つまり」

青年は口を左右に開き、上下の歯を噛み合わせ、苦悶の表情を浮かべた。

「……信用の話でもする気？」

対する女は、首だけを動かし、横顔で青年の方を見た。次いで、ゆっくりと視線を落としながら、

「そんな感情論でリスクを生むのは……馬鹿げてるでしょ？」

そう言い捨てる。

この後、彼女はゆっくりと向き直り、また同じ進行方向へと歩み出す。

こうして、1歩、2歩と歩を進めたところで、

「……死ぬなよ」

との声が聞こえた。青年の声だった。

もう一度足を止めた彼女は、依然背中を向けながらであったが、

「努力はします……私だって、死にたくはないので」

と応えた……

―同日のこと。

ここは、とある古びた教会の、聖職者たちの休憩室のような場所。

部屋の奥のテーブルには積まれた書類がそれはさながら山脈のように連ねられた。

その合間には多種多様な言語で書かれた新聞記事も交じっている。例えばギリシャ語の記事なら、「クノツソス宮殿の牛のプレスコ画が盗難に遭った」だとか、「クノツソス宮殿に出入りする謎の銀髪の男」なる特集記事もある。またロシア語の記事ならば、「資産家のゾオルケン氏がシエリダン・レ・ファニユの短編集を購入した」などの記事が見受けられる。

そして今、ドアを開けて、一人の男性が入ってきた。

「……あら、ブラザー・オルテンシア。どうかしたの？」

首を横に伸ばし、書類の端より一人の老女が顔を見せ、そう告げた。

彼女は東洋人らしいが、その姿はまた「天使にラブソングを」のマギー・スミスによ

うでもある。

「お伺いしたい……日本の秋津なる都市で開かれる、聖杯戦争について」

と、それがオルテンシアの用件であった。

すると老婆は、

「聖杯といえど、あれはもののいい贋作に過ぎません。アナタが気にかけるような代物ではありませんよ？」

と優しげながら論すような物言いので応えた。

「しかし……その名がつく以上は、教会としても見逃す訳にはいかないハズです。事実として、教会から人が送られている……前回はアナタ自身が、そして今回はアナタの娘さんがそうであるように……そうでしょうか？シスター・言峯」

こうして言峯の名で呼ばれたこの老婆は、チェーンのついたメガネを机上の隅に置くと、年齢を疑う程に速くサツと立ち上がり、そこから後はゆつくりと、けれども確かな足取りでオルテンシアの横まで歩み寄ると、

「どこで知ったかはあえて問いませんが……それを知り、アナタは何をするというのですか？」

と尋ねた。

「勿論……叶えたい願望があるのですよ。あの杯の奇蹟で」

それを聞いて老婆は、ゆっくりと彼の側から離れていくと、その周囲に円を描くように歩き出したかと思えば、

「それで……アナタはどこまでを知っているのですか？あの杯について」

と次の問いを投げかける。

「秋津の聖杯戦争……その起源を」

「……ほう」

「遠坂、間桐、アインツベルン……始まりの御三家と評される三者が、魔術師の悲願たる根源への到達を目的として敷設したものと……窺いました。しかし、今なお、根源に至れた試しはない、と」

「それは当然でしょう……何せ、血で血を洗う争いの末、聖杯は破壊されてしまったのですから……どのように戦うかも、ご承知か？」

「サーヴァントの召喚でしょう……人類史に名を残す英雄たちを聖杯の力を借りることで召喚し、従者として使役する……」

「……令呪を、用いて、ね」

その一言を聞いた瞬間、突然、オルテンシアは自身の右腕の袖をまくり上げた。

そうして、

「これは……令呪、ですよね？」

と言った。

そうして見えた腕には、3本の赤い線が波を描くように刻まれていた。

「この令呪、1本につき、1度の命令をサーヴァントに強制することができる……違いますか？」

言峯が足を止めた。その身は今、例のテーブルに手をつき、オルテンシアに背を向けている。

「召喚したのですか？……サーヴァントを」

「いえ……」

「では……触媒は私が手配致しましょう。丁度、いいものが手に入ったところでした」

そう言った言峯が手をゆっくりと引くと、1枚の新聞記事がそこにあった。

イタリア語で書かれたそれには、「音楽家モーツァルト直筆の原稿がイタリアで発見された」との記事であった……

(To Be Continued……)

第四話 それぞれの背景（2）、召喚

—そこは朝方の秋津駅。

自動ドアが開くと、外に停車する1台のタクシーの方へと歩く人影が見える。

銀色の髪に、日焼けした小麦色の肌、そしてサングラス。

そんな彼は、タクシーの運転席の横へ立つと、窓ガラスを3度ばかりノックした。

高いびきをかいていた運転手が跳ね起き、

「……ハッ、ハロオー?」

といくらか頓狂な声で応じる。すると、この銀髪の彼は、

「安心しろ……日本語は分かる」

と返して、1枚の紙を差し出して、こう言った。

「……(ヤ)まで頼む」

「はっ……はあ」

紙を受け取ると共に、運転手はこうして尚もいくらか間拔けな返事を返した。

銀髪の彼がドアを開け、後部座席に腰をかけるまでの数秒で、運転手は紙へと目を通した。それは地図になっており、目的地とおぼしき場所を赤い丸で囲んでいた。

「この……丸の所でいいんですか？」

と振り返り、後部座席の彼に尋ねる。

「……ああ」

との応答を聞き、運転手は正面へ向き直って、エンジンをかけた……

走り出してから少し経ち、信号に止まったところで、運転手が、

「……つて確か……メリーさんの館……ですよね？」

と言ってきた。

「……ああ？」

などと聞き返せば、

「いえ……アダ名というか、なんて言うのか……この辺りじゃ不釣り合いなヨーロッパのお城みたいな建物でして……とつくの昔に人は出払っているらしいんですが、心霊スポットだとかってんで地元の間には多少人気はありますが……」

とそう冗談っぽく話す運転手。

特段反応を示さない客ではあったが、続いての、

「何でも、白い髪に赤い目をした異邦人らしき女性を見かけたかとか、見かけないとか」

との一言には、多少ながら眉を動かした。もつとも、

「………何でまた、……に？」

とする問いには、何も語らなかつたが。

やがてタクシーが止まり、男が降りる。

タクシーが走り去つて後、目前に建つボロボロの城を見て、男はこう呟いた。

「……帰つたぞ」

と。言葉と共に、サングラスを取つた。

その両目は、血のような赤色をしていた……

―そこは、図書室。

天井と接する程に高い本棚いくつも並んで部屋の半分以上を占拠するものだから、空間は正味各クラスの教室と同じか、あるいはもつと狭い部屋となつている。縦長のテーブルが2つばかりと、それに1つにつき、右にも左にも10席、計40ものイスが備えてある。

もつとも、下校時刻の近付き、斜陽の射す紅い部屋には今や、1人の女子学生を残すのみであるが。

紫髪で長髪で、どこかな儂げな横顔を見せる彼女の手には、1冊の本。

その本、おどろおどろしい藍色をバックに不気味な蒼白い肌の胸像が描かれた表紙のそれは、シエリダン・レ・ファニユ・著、平井呈一・訳の「吸血鬼カーミラ」。

ゆつくりとした手付きでページをめくる彼女の横で、忙しない足音が響き出すは、そ

れから間もなくのこと。

窓ガラスに隣接した比較的背の低い本棚と天井との割に広い隙間から、クシヤクシヤの髪が見えた。おそらくはパーマでもかけているのであろうが、どうにもそれは、海藻、例えばワカメのようである。

一目見た彼女は、一瞬目を丸くしたが、間もなく止め、その表情はどこか悲しげな微笑みへと変じた。

「はああ……はああ……」

そんな荒い息遣いが外から聞こえたかと思えば、これまた荒っぽくドアを開け、一人の男子学生が姿を現す。

勢いよく開けられたドアが激しい音を響かせる横で、曲げた両膝に手をつけて顔を下げている彼が、ゆっくりとその頭を上げ、その儂げな少女を見て、

「いよかってあ……やっぱ、こっここにいたあ」

なんて呼吸に言葉を乱されつつも言った。

対する少女は、本に付随する細い紐を、今開いているページの真ん中に挟むと、ゆっくりと本を閉じて、それから、

「どうしたの？ 矜（きょう）ちゃん」

と尋ねた。

「ねえさんに……早く伝えなきゃってえ、思つて……」

「……何を？」

と彼女が聞く側で、少年は小走りやはや歩き気味に駆け寄り、テーブルを挟んだ少女の向かい側で、イスに座らずテーブルに両手をつき、

「届いたんだよ……触媒が」

と告げた。

少女は左右に首を動かし、周囲に人がいないことを再確認する。

対して、少年は心なしか顔を近付けると、こう話を続けた。

「遠坂も、もう準備を済ませたらしい……トロイヤの遺跡で発掘された、古代ギリシヤ時代の兜が遠坂家に届けられたって話を聞いた。召喚される英霊にはおおよその見当がつく」

こうした話の中途、少年は姉だ呼ぶ少女から若干顔を反らしたかと思えば、小声でこう呟いた。

「……きつと、最初はヘクトールの馬でも再現するつもりだったんだらうな……計画が狂つてよかつたよ。あの淫獣め」

少女がそれを聞き逃すはずもなく、ボンと多少荒くテーブルに本を倒して相手の視線

をまた向けさせると、本の叩きつけられた側を軽く手で撫でながら、こう言った。

「よくないよ。憶測で人を悪く言うのは」

「……だけど」

と少年が食い下がれば、続けて、

「新生クンのことが気に入らないのはわかるよ……同い年で、何かにつけては比べられて、嫌な思いもしたとは思う……でもね。陰口を言うことはね、相手には敵わな
いって言うてるのと同じなんだよ？……もし、自分が正しいって分かっているなら、
ちゃんと相手に言える筈だよね？」

と諭す。

少年が納得がいけないという顔付きでいれば、少し微笑んで、

「矜ちゃんが正しいのは……おねえちゃんが知ってるから」

とも言った。

しかし、なおも少年は腑に落ちないのか、

「ねえさんは、まだ……新生のヤツに未練があるのか？」

と告げた。

「……どうして？」

首を傾げて少女が問えば、

「だって、いつも……ねえさんは新生の肩を持つじゃん」

というのが少年の返答。

言った拍子に、テーブルについた手をあげ、ポケットに入れると、やや斜めに構える少年。

「今更……」

そう呟いたのは、少女の方だった。少年が、

「今更？」

と聞き返すと、こう答えるのだった。

「今更、なのよ……おねえちゃんと、新生くんは」

そう答えた少女の視線は、どこか下を向いていて、なお一層薄幸そうに写った……

—あの松明の並ぶ暗室で、あの少年がいて、やはり足下は暗くよくは見えないが、おそらくは血であろう、赤いサークルが描かれている。あの鳥を描いたらしき木彫りの人形もそこにはある。

少年はゆっくりと目を閉じ、赤い紋様が浮かぶ右手を前に、左手をそれに添え、深呼吸と共に、こう唱えた……

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シユバインオーグ。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する……」
目前では、件のサークルの周囲が光を放ち始めている……

「……告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。
誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

一連の詠唱を終えたところで、目前へと深い霧が立ち込め始めたかと思うと、サークル中央、地に足を下ろす何者かの足音が聞こえた。

……そこにいたのは、『褐色の肌をした流麗な白衣の青年』

「勝つたぞ、若刃……この戦い、ボクらの勝利だ……」

そう叫ぶ少年の声を、外でドアに凭れて聞く彼女は、言峯若刃は、何を思ったことであらうか……

(
T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:
)